
右のポッケは私のもの

葉月 奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

右のポツケは私のもの

【Zコード】

Z0692P

【作者名】

葉月 奏

【あらすじ】

高校で出会った二人は
偶然にも偶然が重なり、
同じクラスになつたり席がトナリになつたり
合宿の班がいつしょになつたりしているうちにお互に心惹かれあ
つてゆく。

そして付き合い始めた二人。

はじめは、まわりが羨むほどのカップルだったが

だんだんすれ違いが生じはじめ、愛香は翔太の浮気現場を目撃して

しまつ。

そこで愛香がとった行動とは？

出会い

今年もやつてきた。寒い冬が。人のぬくもりを感じられる季節が…

「寒~い。ねえ、ねえってば。」

「ん? 寒いことなんていちいち言わなくともわかってるよ。」

「なんか翔太最近冷たいよ?」

「そうか? 愛香がそう思つてるだけだろ? いつも思い込みだけは激しいからなあ。」

「ちよつとお! 思い込みだけってなによー。」

「はいはい。わかったわかった。別に怒つてねーよ。しかし今日は一段と寒い~。」

「ほら~。あ、やつきの言葉そのまま返してあげるよ。『んなこといちこち言わなくて

もわかつてるよ。』って。」

「そのままじゃねーし。とにかく寒い。カイロ貸してッ。」

「もう少しそうがないなあ。ハイ。」

「おう。わんきう~。」

いつもこんな会話をしながら駅までいっしょに帰つてた。私たちは高校で出会つたからいつしょに帰れるのは中央坂の駅までなの。本当はもうとこっしょにいたいのに……

「一年前 -

私たちは同じクラスになつた。偶然にも偶然が重なつて席もトナリになつた。最初は、

全然何も思わなかつたのに、一年の時、勉強合宿で自由時間の班がいつしょになつて、初

めてお互いのことによく知った。それから、同じ歌手が好きなん」と
もわかり、意気投合した私たちはそのまま何事もなく、秋を迎えた。でも、気になつて気
になつてしかたがなかつた。こつちを向いてほしい。お願い。一度でもいいから……。あ、
目が合つた。すごく嬉しい。あれ、こんな気持ち……なんて言つんだっけ。
このとき、初めて気づいた。私が翔太のことを好きなんだつて。でも、ふられたらどう
しよう。不安な日々が続いた。でも、9月10日、翔太が駅にいた。
「あれれ～？ どうしたの？ いつもなら帰つてるのに。友達でも待
つてるの？」
「いや。花櫛さんを待つてた。」「え……。私？」
「うん。ちょっと話したいことがあるから、家の近くまで送つて
いつてあげるよ。」「え、あ、うん。ありがと。」
そして電車が来た。
「あの……話つて……？」
もしかして……？
「ああ。あのさあ、俺……花櫛さんのこと……好きなんださ。」「え……。」
数秒間私の中で時が止まつた。
「やっぱ困るよな。こきなり、好きだなんて言われても……。」「そんなことないよ！」
車内の乗客が一斉に私のほうを向く。
「ごめん。私もね、藏持くんのこと、好きなんよ……。」「え……ほんとに？」「嘘つかないよ。」「え、じゃあ付き合つて……？」「え、じゃあ付き合つて……？」

「いいに決まってるじゃん。」

「夢みたい。」

「ほっぺつねつてあげよか?」

「やめて。」

こうして、私たちには付き合い始めた。
帰りは絶対いっしょに駅まで帰った。駅からは別々の電車に乗る。
はじめは、時々触れる左手を気にして歩いてた。
今では翔太の右のポケットのなかに私の手はある。

すれ違つていぐ二人

出会つてから2年が経つた。今週の月曜日は一人の記念日だった。いつもは寄り道なんかしないで帰るけど、その日だけは特別だつた。去年から、記念日にはすこしデートして、その週の日曜日には一日中ずっと一緒に

いる。今日は1週間経つて日曜日です。

待ち合わせの時間の10分前についた私。いつも翔太は早いから今日こそは

わたしが先に行つて待つてやろうと思つて。だけど翔太は30分経つても、1時間経つても来なかつた。なにがあつたのかな? そう思つて翔太に連絡してもでてくれない。不安が私のなかでよぎつた。

でも、これ以上待つてられないからもう帰るつ……。メールだけ打つて……。

『翔太へ

今どこにいるの? もう1時間も待つてるし、寒くなつてきたからもう帰るね……。』

私は駅へ向かつた。

そうだ! 人のほうが買い物しやすいからちょっと買い物に行こうかな。

駅の近くにある商店街を一人で歩く。

あれ? なんか見たことある人が向こうから歩いてくる。誰だらう? あ! 美奈だ。美奈は私の幼馴染で小さいころからの親友だ。

美奈の隣には見知らぬ外国人男性がいた。

邪魔しちゃ悪いから声かけないでそつとしておこう。

そう思った。すると

「あーー！愛香ちゃん。一人？」

「あ…うん。ちょっと事情があつてね。」

「え…大丈夫？」

「うん。全然大丈夫だよ。それより…？」

「ああ！そいついえば紹介してなかつたよね。ウチのダーリン。マイクよ。」

「ハジメマシテ。ワタシハマイクとイイマス。」

「Oh , I ' m a i k a . I c a n s p e a k E n g l i s h a l i t t l e . N i c e t o m e e t y o u .」
「Oh , r e a l y ? N i c e t o m e e t y o u t oo .」

「そつか愛香も英語喋れるんだよね。」

「一緒に英語習つてたじやん。忘れちゃつたの？」笑

「覚えてるよ 笑」

「じゃあ、邪魔しちゃ悪いから。またね」

「うん。バイバイ」

美奈とマイクと別れてから少し歩いていた。

あれ？また私、前から来る人知つてる。でもなんだか嫌な予感がするるのはなぜだろう？

え…？翔太？わかんない。人が多すぎて。私とうとう幻覚見えてるのかな？

…いや違う。翔太だ。一人なの？…違う一人じゃない。女人人がいる。

嘘でしょ？でも右のポッケには翔太の手だけじゃない。その女人の手も…。

嫌よ。私は信じたくない。でも、私の目は近づいてくる人は翔太だと明らかにしている。

「翔…太？」

わたしは知らぬ間に言葉を発していた。

「愛香？」

翔太にも聞こえてたみたい。

「ねえ翔ちゃん。この人だあれ？」

女の人は言う。

「おまえには関係ない人だよ。」

「あなた誰？」わたしは思い切って聞いてみた。

「あなたこそ。翔ちゃんの何？」

「私は、翔太の…」

「こいつはただの幼馴染だよ。」

「あ？ふざけないでよ。そう言ってやりたかった。」

「でもそう言う前に翔太とその女の人は行ってしまった。」

「もう…意味わかんないよ。あの人はだれ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0692p/>

右のポッケは私のもの

2011年1月25日01時58分発行